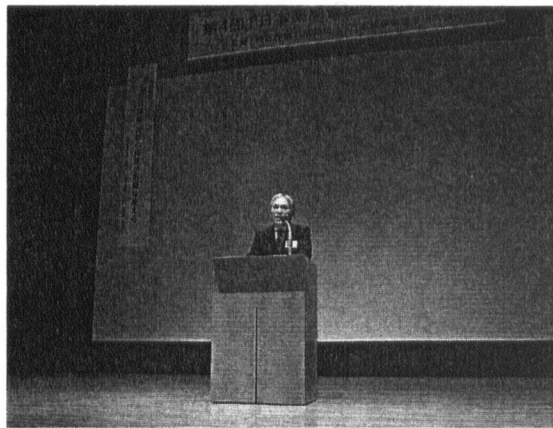


日本薬局管理学研究会

第4回年会を開催



石塚会長

特定非営利活動法人 日本薬局管理学研究会(石塚英夫会長・(株)望星薬局)は7月5日、津田ホールにおいて第4回年会を開催した。年会では一般講演5題のほかシンポジウム、特別講演が行われた。

一般講演では①脳卒中急性期治療の実際―脳梗塞(富田 陽氏・(株)ナカジマ薬局)②パーキンソン病薬物治療における症状日誌の利用―作成とその成果について(町田匡俊氏・(株)ピノキオ薬局)③服薬アドヒアランスに関する研究―第3報―レセプトパソコンを用

いた服用歴調査(田代康壽貴氏・まごころ薬局)④薬剤師職能と認定制度―現状と課題(串田一樹氏・昭和薬科大学)⑤昭和大学薬学部における薬剤師教育の取り組み―実務実習事前学習の構築(小林靖奈氏・昭和大学薬学部)が行われた。演題④⑤においては特に「薬剤師教育と専門薬剤師」をテーマに発表された。

続いて行われたシンポジウム「医薬分業Ver.1.0―保険薬局における専門薬剤師の育成について―」では次の通り、諸団体による専門薬剤師育成の状況が説明・紹介された。▼①妊婦・授乳婦専門薬剤師(日本病院薬剤師会) 林昌洋氏・国家公務員共済組合連合会虎の門病院薬剤部長②緩和薬物療法認定薬剤師(日本緩和医療薬学会) 片山志郎氏・日本医科大学付属病院薬剤部長③日本糖尿病療養指導士(日本糖尿病療養指導士認定機構) 厚田幸一郎氏・北里大学北里研究所病院薬剤部長④保険薬局における活動(日本緩和医療薬学会) 菅原敏江氏・ファーマライズ薬局東北Aエリアマネージャー。最後に特別講演「iPS細胞 世紀の発見が医療を変える」が八代嘉美氏(慶應義塾

大学医学部)により行われた。

シンポジウムでは林氏、片山氏、厚田氏らがそれぞれの立場から、専門薬剤師育成について述べた。林氏は「医療崩壊を背景にスキルミックスが重要視されている。処方設計支援、副作用モニタリングなど薬剤師として分担できる業務は多い」とし、薬剤師職能を母児の健康管理とQOL向上に活かすことができる述べた。また妊婦への服薬カウンセリングの特殊性として、①母親だけでなく次世代へ及ぼす影響にも配慮するべき②母児の利益を最大限に、不利益を最小限にするための科学的根拠に基づいた判断が要求される③胎児に関する有害性情報提供が、その命の選択につながりかねない④妊婦に対する治験は困難であるため、カウンセリングのちに安全性情報を創出することが必要―を挙げた。

片山氏は緩和薬物療法認定薬剤師認定までの流れ、WHOの除痛ラダー、がん患者における痛みの種類と原因、嘔気及び嘔吐の原因と治療薬、副作用対策薬による副作用などの関連項目において広範にわたる講演を行った。なお片山氏は10月17・18日にパシフィコ横浜で行われる第3回日本緩和医療薬学会年会の年会長を務める。厚田氏は日本糖尿病療養指導士について、誕生までの経緯、制度の概要、有資格者数、5年ごとの認定更新、薬

局薬剤師への受験資格付与などについて述べた。有資格者は15000名弱おり、そのうち薬剤師は約2200名(14.9%)で、その他は看護師が約7300名、管理栄養士が約3400名など。また糖尿病療養指導の際立った特徴として、自己管理として患者自身が成長していく点を挙げた。八代氏は特別講演で、幹細胞と多分化能、ES細胞の性質、iPS細胞を用いた再生医療など説明した。

IMSグループ 新人研修会及び学術講演会を開催

板橋中央総合病院などからなるIMSグループは8月1日、都内で新人研修会及び第10回病棟薬剤業務研修会を開催した。主催はIMS薬剤部学術教育委員会。

新人研修会開催にあたりIMS薬剤部長挨拶として、大池育夫氏(板橋中央総合病院薬剤部長)が「今年からIMS薬剤部を組織として運営することになった。グループ内での薬剤部活性化、薬剤師の継続勤務による専門資格取得支援、薬剤部という職能集団としてグループ内での認知度と地位を向上させることなどが組織化の大きな目的。薬剤部の理念は「適正かつ安全な薬物療法に参画する」とした。処方設計への参画など、医師や看護師と同じ目線で物事を考えていきたい。